

島根県立大学  
国際関係学部 国際関係学科  
国際関係コース

令和8年度（2026年度）  
総合型選抜（自己推薦）

小論文

【解答時間 90分】

以下の注意事項をよく読んで指示に従うようにしてください。  
指示に従わない場合は、不正行為と見なしますので、注意してください。

1. 解答開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。許可なくこの問題冊子を開いた場合は、不正行為と見なします。
2. 解答時間は90分です。
3. 試験問題は、1ページから5ページです。解答開始の合図があった後、問題冊子を確認し、印刷不鮮明な箇所等があった場合は、直ちに申し出てください。
4. 解答用紙は2枚あり、問題冊子とは別になっています。解答は指定された解答用紙の解答欄に横書きで記入してください。
5. 受験番号、氏名は2枚の解答用紙の所定欄すべてに記入してください。
6. 問題冊子の余白を下書きに利用しても構いません。
7. 試験時間中の退出はできません。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題 下の文章は、2024年7月に発表されたものである。この文章を読んで、後の問いに解答しなさい。

クルド人は「国を持たない最大の民族」と呼称される。トルコ、シリア、イラン、イラクなどにまたがって居住し、独自の言語や文化を持っている。だが、少数民族ゆえに各国では弾圧、差別の対象となり、生まれ育った国を離れる人も少なくない。

日本では九〇年代初めより、主にトルコで迫害されたクルド人が、難民として住み始めるようになった。

いま、その多くが川口や<sup>わらび</sup>蕨で暮らすのは、そこにクルド人コミュニティが存在するからに他ならない。では、最初に住み始めたクルド人は誰なのか。

在日クルド人の中で「最初に川口に住んだ人」と言われるのが、いまでも同地で解体業を営むタシ・メメットさん（五四歳）だ。

資材置き場の一角で、タシさんは「日本に来たこと、間違っただけかもしれないな」と浮かない顔を見せた。

タシさんは一九九三年、トルコを離れて日本に来た。日本のことはよく知らなかったが、平和であること、そして観光目的であればビザを必要としない国だったこともあり、日本ならば難民として受け入れてくれるだろうと思った。

「そのころトルコでは、クルドの言葉を話したり、音楽を聴いたりするだけで迫害された。正直、トルコ以外の国であれば、どこでもよかった」

伝手はない。知り合いもない。成田空港から東京駅までたどり着き、この先どうすべきかと悩んでいる時、親切なパキスタン人が声をかけてくれた。その人は言葉もわからず途方に暮れていたタシさんを、自宅のアパートまで連れて行ってくれた。そこが、川口市だった。

「それからだよ。生きるため死に物狂いで働いた。下水道の工事、建築現場、解体。日本人がやりたがらない仕事をして、生活を安定させました」

そんなタシさんを頼ってクルド人が川口に来る。さらにその人を頼って別のクルド人が。

気が付けば県南部<sup>(注1)</sup>がクルド人集住地域となっていた。

タシさんは結婚もして正規の在留資格も得た。だが、やはり、いまでは「不安しかない毎日」だと話す。

「差別がひどい。こんな国だとは思わなかった。妻や子どものことを考えたら難しいけれど、他の国に移住したくなる」

車を運転していたら、隣の車線を走っていた車から、「クルド人は帰れよ」と怒声が飛んできたこともある。いきなり「テロリスト」とからかわれたこともある。会社のクルド人従業員からも、「作業中に『国に帰れ』と言われた」といった報告が幾度もあつ

た。

「納税もしてる。ガイジンだとちょっとしたことでも問題にされるから、素行に気をつけろと社員にもしつこく注意している。それでもやっぱり、クルド人は悪いガイジンってことにされてしまうんですね」

多くのクルド人が、差別が激しくなったのは、この一年だと口をそろえる。それまでは差別がないというよりも、日本人の多くはクルド人の存在に無関心だった。

(A) では、なぜに突然、差別が深刻化したのか――。

一つのきっかけとして「入管法改正」を指摘するのは、前出「在日クルド人と共に」の温井さんぬくいだ(注2)。

「昨年、国会で改正議論が進められる中、難民申請者の多いクルド人の存在が注目されました。それまでクルド人が話題となることはほとんどなく、実際、私たちへの取材も少なかった。ときおりメディアが報じてきたのは、トルコの迫害から逃れた“かわいそうなクルド人”という記事や映像ばかりで、リアルなクルド人の姿を描いたものはあまりなかったんです。しかし、入管法をめぐる報道のなかで、クルド人の中の非正規滞在者がクローズアップされ、難民・移民に拒否感を持つ人々を刺激した」

つまり、長きにわたって関心を持たれなかったクルド人が、入管法の審議をめぐる過程で“発見”されたのである。それが日本社会に巣くうゼノフォビア（外国人嫌悪）を引き出した。SNSでは、難民申請者の強制送還を容易にする入管法改正を後押しする形で、クルド人に対するヘイト書き込みが急増する。嫌悪は一気に差別へと飛躍したのだ。

川口市などでは、もともと日本人住民との間でゴミ出しや生活騒音などをめぐって、トラブルがあったことも事実だ。クルド人による無免許運転、死亡事故などの犯罪行為を“民族問題”にすり替え、問題視する市民もいた。

さらにこうした“世論”を意識したのか、川口市議会では昨年六月、国や県などに「一部外国人による犯罪の取り締まり強化」を求める意見書を可決した。「クルド人」と名指ししているわけではないが、同市がまるでクルド人によって「無法地帯」とされたように捉えた向きもあろう。

その翌月には「絶妙の間の悪さ」（温井さん）で、クルド人の集団が川口市内の病院駐車場で騒ぎを起こすといった“事件”が発生する。これは女性問題をめぐるクルド人男性同士のトラブルが端緒となったものだが、対立した当事者二人が同じ病院に運ばれたことで、双方の親族や友人などが病院前で鉢合わせし、騒動に発展した。これをX新聞が大きく報じたこともあり、ネットへの書き込みはさらに過熱する。同時にクルド人に対する嫌がらせ、「追放」を訴えるヘイトデモが頻発した。

「ネットだけを見ていると、まるで川口や蕨がクルド人に占領され、暴力渦巻く暗黒

地帯のように思えてしまう。まるで映画『マッドマックス』の世界のようです」（温井さん）

同地を訪ねてみればわかることだが、実際はいたって平穏で、新しさと野暮ったさが入りまじった、当たり前前の生活空間しか見えてこない。明らかに海外にルーツを持つ人の姿が目立つのは当然だ。川口市の外国人住民は、この約二〇年間で一万四六七九人（〇四年）から三万九五五三人（二三年）と二倍以上に増えている。その一方で、同時期の刑法犯認知件数は一万六三一四件から四四三七件と激減しているのだ。暴力支配による荒涼たる世界観を描いた『マッドマックス』には程遠い。

（中略）

私は川口、蕨で日本人住民からも話を聞いて回っている。「クルド人が怖い」と話す人も少なくない。「たむろしているのが怖い」「何をされるのかわからないから怖い」——そうした声も耳にした。実際に犯罪を起こしたクルド人もいるのだ。被害者がいる以上、たとえネットなどのデマに影響されたとしても「怖い」を全否定はできない。

だが、いま、本当に「怖い」思いをしているのは、「出ていけ」と罵声を飛ばされる一方のクルド人ではないのか。

盗撮を咎めたら車をぶつけられた前出のクルド人男性<sup>（注3）</sup>は、その直前、「外国人怖いな！」という加害者の声を聞いている。

私はこれまで外国人差別の現場取材し続けてきたが、（B）日本人の側が「怖い」を連発するのは、もはやおなじみの光景でもある。在日コリアンも、中国人も、ブラジル人も、ベトナム人も、みな「怖い、怖い」と言われながら差別されてきた。

考えてもみてほしい。外国人はこの国においてはまだ、圧倒的な少数者なのだ。デマや差別煽動によって、自らが勝手に「怖い」存在にされてしまう日本社会こそが、本当の意味で「怖い」。

最近では、ネットで日本人に攻撃的な言葉を書き込んでいる自称クルド人が、実はトルコ在住のトルコ人であったことも、Y新聞の報道で明らかとなった。対立するクルド人を<sup>おとし</sup>貶めるため、在日クルド人になりすましていたのだという。しかし、この人物の投稿によって、クルド人があたかも“日本占領”を企んでいるかのように、喧伝されてきたのだ。これを信じた日本人から攻撃されるクルド人のほうが「怖い」と感じるに決まっているのではないか。

それでもデマは止まない。差別が煽られ、ヘイトデモは続く。メディアの一部もそこに加担する。

クルド人側も黙っているだけではない。今年三月、川口市内に住むクルド人一〇人や

クルド人の夫を持つ日本人女性、クルド人経営の企業などが、差別的な投稿で名誉を傷つけられたとして、SNSでクルド人批判を続けるフリージャーナリストのZ氏に慰謝料など五〇〇万円を求め、東京地裁に提訴した。原告の一人である日本クルド文化協会代表理事のチカン・ワッカスさんは、「無責任な投稿で子どもたちまでいじめを受けるようになった」と訴える。

不安と恐怖の中で、クルド人は地域でこれからどうやって生きていくのか。(C)「共生」は実現できるのか。日本社会に住む日本人の一人として、私なりに答えを見つけた。そのためにいまも、埼玉県南部での取材を続けている。

(注1) 川口市や蕨市などを含む埼玉県南部のこと。

(注2) 外国人支援団体「在日クルド人と共に」の<sup>ぬくいたつひろ</sup>温井立央代表理事のこと。

(注3) 2024年5月10日、さいたま市内の資材置き場を撮影していた車の運転者を注意しようとした際、急発進した車にぶつけられて負傷した川口市在住のクルド人男性のこと。

(出典：安田浩一「ルポ 埼玉クルド人コミュニティ」『世界』第983号、2024年7月号、121-124頁。なお、出題にあたっては、一部の文言を変更し、文章の一部と見出しを省略した。)

問いは次のページにあります。

- 問1** 下線部（A）について、近年クルド人に対する差別が深刻化した背景には、どのような要因があると著者は指摘しているか。文章中の事例を挙げながら、180字以内で説明しなさい。
- 問2** 文章では、在日クルド人が「差別」や「不安」を感じる一方で、下線部（B）に示されているように、日本人住民も「クルド人が怖い」という感情を抱いていることが述べられている。このような状況が生じる背景には、どのような要因があると著者は指摘しているか。複数の要因を具体的に挙げて、280字以内で論じなさい。
- 問3** 下線部（C）の「共生」について、著者は在日クルド人と日本社会との間に生じている不安や対立を踏まえ、「共生」が実現できるのかと問題提起している。「共生」とは何かを示したうえで、それが実現可能かどうかを考察しなさい。さらに、実現に向けて日本社会にはどのような姿勢や取り組みが求められるかについて述べなさい。文章の内容を適切に参照しつつ、高等学校での地理歴史・公民科目を通じたあなた自身の学びや経験も踏まえ、600字以内で論じなさい。